

## 近世大坂の言説に関する一考察

野 高 宏 之

### はじめに

日本の都市史研究は権力との関係や都市の類型化などが主流であった。とりわけヨーロッパ中世の自由都市とその市民に相当するものを国内に求めることへの関心から、中世の町衆や近世の町人に研究の焦点が集まった。1970年代後半から、都市への関心が建築学や社会学・民俗学など各分野でたかまった。歴史学もこうした大きな流れにのり、主として近世史において生活の基礎単位とする町共同体の研究が進み、やがて都市と町共同体を結ぶ存在として、京都の町代や京都・大坂の町組の研究が進んだ。1990年代からは、考古学の成果を背景に「都市的な場」の発見をめざした中世史に対し、近世都市史研究は都市の内部にみられるさまざまな制度や社会集団の研究が進んだ。その一方で、都市そのものの特質をテーマとする視点がおろそかにされてきた。

このような動向に対して宇佐美英機は、都市の中心的・本質的なものをみる視点が必要であると指摘した（宇佐美2010）。これが都市全体をとらえる視点の1つであるが、別の視点もある。都市固有の特色を明らかにする視点である。近世大坂についてみるならば、従来の「町人の都」大坂ではない、武士の町・軍都大坂という側面をとりあげた研究が岩城卓二・藪田貫・渡邊忠司らによって進められている（岩城2006、藪田2005・2010、渡邊2003）。

藪田は『武士の町 大坂』のなかで、それまで等閑視されてきた大坂の武士的な要素を、武鑑や日記といった史料から拾い上げている。それと同時に、「町人の都」という言説がどのように生まれてきたかという点にも注意を払っている。一方、藪田とならんで近世都市大坂研究を牽引する塚田孝は「天

## 論文

下の台所」といった言説にとらわれない新たな大坂像が必要であると述べて、都市大坂で活動する諸集団とそのネットワークを掘り起こしている。都市に対する言説をも研究対象とする藪田とのあざやかな対照がある（塚田2002、塚田2006）。

本稿では、近世大坂をめぐる言説をとりあげ、その多くが近代以降に成立したものであることを明らかにし、近世大坂像が近代以降に形成されたことを論じるものである<sup>①</sup>。なお、本稿では近世大阪を「大坂」、近代以降の大阪を「大阪」と区別して表記する。

### 1 天下の台所

藪田貫は『武士の町 大坂』を

江戸時代の大坂といえば、「町人の都」「天下の台所」と相場が決まっている。

という書き出しから始めている。大坂の言説を代表するものとして、「町人の都」と「天下の台所」をあげている。本稿でもこの2つから検討することにした。

「天下の台所」は高校日本史の教科書にも採用され、一般には江戸時代から使われていた用語と理解されてきた。かつて筆者はこの言説を検討し、大阪史編纂長であった幸田成友が『大阪市史』の原稿執筆の段階で用いたのが最も早い事例であることを確認した（野高2007）。ちなみに発行の順序でいうと、幸田が『大阪市史』原稿執筆完了後にまとめ、明治43（1910）年に発表した『大塩平八郎』が早い。「天下の台所」が載る『大阪市史 第二』は大正3（1914）年の刊行である。幸田成友は幕臣の子弟。文豪幸田露伴の弟である。東京帝国大学史学科でランケ史学を学んだ。

『大塩平八郎』の書き出しは名文である。

大阪は天下の台所である、然り台所であつて書院又は広間では無いが、

台所の一小事は一家の煩いとなり、大阪に生じた異変は海内に波動する。

これによって、『大塩平八郎』とともに「天下の台所」も知識人の間に広まったと思われる。

「天下の台所」は幸田の造語である。『大阪市史』執筆にあたって、幸田はドイツ流の実証史学を範とし、すべて典拠史料にしたがって書くという原則をつらぬいた。「天下の台所」が登場する『大阪市史』第二の「問屋と仲買」という項目では『商事慣習問目並報告書案』を利用した。この史料には大坂商業の特徴について以下の記述があった（下線部筆者）。

元来大坂ハ全国ノ中心ニ位シ、関西ノ要津ニシテ、往昔ハ諸国ノ物資先ヅ此ニ集リ、更ニ之ヲ他国ニ輸送スルガ故ニ、全国至ル処、我大坂商民ノ販路ナラザルハナク、実ニ当時我国ノ商権ハ、大坂ニ掌握セリト謂フモ、敢テ誣言ニアラザルナリ。

幸田はこの項目で、大坂が商権を得たという記述の引用を避けるため、幕末に使用例のある「諸国の台所」という用語をもとに、より滑舌のよい「天下の台所」というコピーを創作した。これが筆者の考えである。「天下の台所」という歯切れのよい言葉は大坂人の発明ではなく、東京人の造語なのである。

「天下の台所」は大大阪のプランナーであった関一市長が、近世大坂と大大阪をつなげるキーワードと評価したことにより、本庄栄治郎を長とする『明治大正大阪市史』の編纂関係者がさかんに活用した。さらに戦前の郷土史教育の高まりとともに、大阪市内の小学校では大阪を「天下の台所」と教えるようになった。この結果、市民のあいだで「天下の台所」という言説が定着していった。

ただし幸田の意図とは反する結果となった。大坂は商権を得たという表現をさけるために幸田は「天下の台所」を造語したのである。しかし関一は、大坂が商権を得たあかしとしてこの言説を解釈した。以来『明治大正大阪市史』編纂を通じて「天下の台所」は商業によって日本を支配する大阪を象徴

## 論文

する言説としてさかんに宣伝され、大阪市民に受容されたのである。

「天下の台所」が全国に広まるのは戦後のことである。戦前の小学校教育では、江戸時代の都市として江戸と長崎をとりあげた。江戸時代の外交政策である「鎖国」を長崎で象徴させたのである。戦後まもなくGHQの指導を受け、昭和21（1946）年の国定日本史教科書『くにのあゆみ』は長崎に加え大坂を加えた。「鎖国」という閉鎖的なイメージより、全国に開かれた町人の町というイメージが採用の理由であったと思われる。すると早くも翌年の教科書から「天下の台所」という言説が登場する。この年に発行された大阪書籍『社会科1 わが国土』には「町人の都」とともに「天下の台所」が現れる。

江戸時代を通じて、いわゆる「天下の台所」として栄えた大阪は、まさしく町人の都であった。

昭和20年代後半には中学校の歴史教科書にも登場し、「天下の台所」は学校教育を通じて全国にひろまったのである。現在でも「天下の台所」は大阪の枕詞としてさかんに利用されている。この言説が好まれる要因は多義性にある。使う人の考えによって、この言説はさまざまに解釈できるのである。（野高2007）。

## 2 町人の都

藪田は『武士の町 大坂』で「町人の都」という言説が誕生する経緯を次のように記している。

江戸の武士が与えた「町人国」という言説を換骨奪胎することで、大阪人による「町人の都」大坂という言説が生み出されたのである。

ここには2つの事柄が含まれている。第1に、江戸派遣組のキャリア武士が用いた「町人国」という言説から「町人の都」が派生したということである。

第2に、近代の大阪市民が「町人の都」大坂を造語したということである。

藪田は次に、当初は反権力的な志向の形容としては使われていない「町人の都」という言説が、いつ頃から反権力的志向の文脈のなかで用いられるようになったかを問題とする。「町人国」については、幕末に大坂町奉行をつとめた久須美祐明くす みすけあきが天保15（1844）年3月3日の日記のなかで記述していることを藪田が確認している。しかし「町人の都」がいつ頃から現れたかについては言及していない。

「町人の都」という言説は、京都帝国大学史学科教授であった三浦周行の造語である可能性が高いと筆者は考える。三浦は大正6（1917）年、大阪朝日新聞社主催の講演会で『町人の都』という演題で講演をおこなっている。この講演は、ほかの講演とあわせて岩波文庫に『大阪と堺』として収められている。「町人の都」という言説はこのなかに登場する。

現今の大阪は水の都とか煤煙の都とかいわれるようであるが、もし近世江戸時代の京都を公家の都ということが出来るならば、江戸は武家の都で、大阪は町人の都ということが出来るであろう。私のいわゆる「町人の都」はこの意味において近世の大阪を指したものである。

これが「町人の都」の初見と判断する根拠は以下の3点である。第1に三都比較の記述である。三都の比較は現在も日本史教科書などによく登場するもので、江戸と大坂と京都をそれぞれ「武家の都」「町人の都」「公家の都」とすることもなじみのあるものである。どうやらこれは三浦が広めたようだ。三浦は「もし近世江戸時代の京都を公家の都ということが出来るならば」という仮定法で記述をしている。京都を「公家の都」と表現することが知られていないことがわかる。「公家の都」は三浦の造語であった可能性が高い。第2に、私のいわゆる「町人の都」という表現はすなおに解釈すると、三浦がいうところの「町人の都」ということになる。6年後の講演会でも三浦は「大阪は私のいふ町人の都」と述べている（三浦1924）。「町人の都」も三浦の造語であったことをにおわせている。当時、「水の都」とよばれた大坂を、

## 論文

三都比較の文脈で表現しようとした点に三浦の工夫がみとめられる。第3に「天下の台所」との比較である。先に示したように、「天下の台所」は幸田成友が明治43（1910）年に刊行した『大塩平八郎』によって世に知られるようになった言説である。三浦は『町人の都』で「天下の台所」を引用しているが、それは次のような表現をとる（下線部筆者）。

近世江戸時代の大阪は全国における諸大名領地の産米を始め、多くの国産の集散地で、天下の台所といわれ、それを取扱うために巨万の富を重ねた富豪は多く長者鑑を賑して居った。

これは「天下の台所」がすでに人々に知られていることを前提とした文言である。したがって「町人の都」もすでに社会に流通している言葉であれば、三浦はそのような表現をしたはずである。しかるに「私のいわゆる」と言ったところから、これは三浦が発明した言説であると考られる。ちなみに「天下の台所」は『町人の都』の緒言第一段落に登場する。そして次の段落で、「私のいわゆる」「町人の都」が登場するのである。以下は推測であるが、東京帝国大学史学科では後輩の幸田成友が数年前に「天下の台所」を造語した。これに刺激を受けた三浦が、この講演で「町人の都」という言説をためしたのである。その際、すでに知られている「天下の台所」を最初にとりあげ、ついで自らの「町人の都」を披露する手順をふんでいる。

引用文にある「都」には「水の都」「煤煙の都」という既成の言説に対抗する意味と三都比較の文脈における位置づけの二重の意味がある。さらに「都」に理想郷の意味をこめていたことが、引用文の前の段落にある次の文章から確認できる（下線部筆者）。

大阪は（中略）市民の自治の観念が盛んであって（中略）、封建時代としては、当時の大阪は町人の楽天地、理想郷であった。

このように三浦は「都」に3つの意味をもたせた。このセンスを自賛して

「私のいわゆる」と発言したのである。

幸田の造語である「天下の台所」を三浦が引用したのと同じように、幸田も三浦の「町人の都」を講演会で用いている。大正14（1925）年、大阪で2日間にわたり大大阪記念講演会が開催され、幸田は初日に『維新前の大阪市制』、翌日は『日本経済史上の大阪』という2つの講演をおこなっている（この講演録は翌年『大阪文化史』として刊行された）。初日の講演で幸田は、「町人の都」に言及している。

要するに大阪は町人の都である。町人の都として大阪は日本第一である。江戸は征夷大将軍の御膝元である、武家の都として日本第一である。

翌日の講演では、「町人の都」と「天下の台所」を並べている。

大阪と申しますれば、昨晚も申上げました通り、「町人の都」といふことは、誰もが申すことであります。大阪は「天下の台所」日本全体の台所であつて、日本で消費する所のものを大阪が一手で引受けて居るといふ言葉を、徳川時代にはよく申して居つたので御座います。

先輩の造語である「町人の都」に敬意をはらい最初に述べたのち、自らの「天下の台所」が大坂にはふさわしいことを言外に主張しているようだ。大阪での講演会の前年、幸田は東京商科大学で日本経済史を担当した。その講義録が昭和9（1934）年、『江戸と大阪』として出版された。このなかで幸田は次のように述べている（下線部筆者）。

江戸を武家の都、大阪を町人の都とするは、陳腐平凡な言い方ではあるが、正鵠を得てゐるものであらう。

「天下の台所」にくらべ、大坂を形容することばとして「町人の都」は凡庸であると述べつつ、幸田は三浦の造語を認めているのがわかる。

これに続いて、三浦とは京都帝国大学の同僚であった経済学者本庄栄治郎が大正15（1926）年に発表した論文『徳川時代概観』において、政治の中心地江戸に対して、商業の中心地大坂を「町人の都」と表現している。以後、本庄は幸田の「天下の台所」と三浦の「町人の都」を愛用することになる。

「天下の台所」と「町人の都」は、幸田成友・三浦周行・本庄栄治郎といった大学教官が共有し宣伝することで世に広まったのである。当時の大阪人に、このような造語力はなかったと筆者は考える。

### 3 天下の町人

かつて「町人の都」とともに「天下の町人」という言説が流行したことがある。大阪生まれの経済史家宮本又次が好んで使う用語であるとしながらも、宮本以前にもあった可能性を藪田は指摘している（藪田2010）。

宮本以前に「天下の町人」を愛用したのは本庄栄次郎である。本庄栄次郎は京都の呉服商の家に生まれた。京都帝国大学経済学部の初代教授となり、戦前・戦後を通じて京阪神の経済史の重鎮であった。『明治大正大阪市史』の編纂委員長を勤めたことは先に記したとおりである。

本庄は「天下の町人」を「天下の台所」「町人の都」とともに用いることを好んだ。昭和3（1928）年に刊行した『日本社会経済史』（第6章第3節第1項2都市の発達）で次のように記している（下線部筆者）。

大阪は豊臣氏以来物資集散の一大中心地であり、金力生活の処であり、町人の都として自由の気が強く全然その趣を異にして居る。大阪はその天然の地位と歴史上の関係と富豪の淵叢たるによつて西国・中国・北国の諸藩を初め、関東・東北の諸侯及び寺社・武士等も此処に蔵屋敷を設け、米穀その他の国産を輸送して商人に売却したものである。而して堂島に米相場が立ち、金融の機関が整ひ、菱垣廻船や樽廻船によつて江戸との連絡があり、交通の便、商業の繁盛は年と共に大となり、之に伴つて町人の勢力は益々加つた。当時大阪は『天下の台所』として実に我国経済上の中心地であり、全国の富の七分までは大阪に在りと評せられた。



本庄はこれと同じ内容を大正12（1923）年に講演している。この年、大阪市民博物館で開催された大阪郷土史研究講座において、『大阪経済史』という演題のなかで次のように述べている<sup>②</sup>。

大阪は既に豊臣氏以来物貨集散の一大中心地である。江戸時代に入つて、諸侯の蔵屋敷がこゝに設けられ、堂島に米相場が立ち金融の機関が整ひ、菱垣廻船や樽廻船によつて江戸との連絡があり、交通の便、商業の繁盛は年と共に大となり、之に伴つて町人の勢力は益々加つた。大阪はあくまでも商業の中心地であつた。即ち当時の我国の経済は大阪によつて左右さるゝ有様であり、幕府の財政も大阪の財力によつて維持せらるゝと見て差支へなきものであつた。即ち大阪は商業の中心地たるのみならず、実に我が国経済の中心地たるべきものであつた。

話の内容が昭和3年のものと同じ趣旨であることはあきらかである。しかし、ここでは「天下の台所」「町人の都」「天下の町人」という用語はみえない。ただし本講演の別の箇所、本庄は次のように発言している（下線部筆者）。

大阪は天下の台所である。従つて大阪の町人は天下の町人である。（中略）  
かくて大阪は町人の都であつた。

大正12年の段階では、学術的な内容を発言する場面では言説を使わず、都市大坂のイメージを喚起したい場面では言説を使う区別をしていることがわかる。ところが昭和3年になると、両者を区別することがなくなるのである。「天下の台所」「天下の町人」「町人の都」を連ねる上のような文章は、昭和9（1934）年の『明治大正大阪市史』第1巻第1章緒言にでも繰り返されて、本庄の常套句のひとつとなっている。

以上、わずかな事例であるが、本庄のなかで「天下の台所」「天下の町人」「町人の都」が多用されていく傾向にあったことが確認できた。

## 論文

「天下の台所」と「町人の都」が近代の造語であったのに対し、「天下の町人」は近世に使用例を確認できる。井原西鶴の『世間胸算用』巻三「都の顔見世芝居」の冒頭がそれである。

天下の町人なれば、京の人心、何ぞといふ時は大気なる事、是まことなり

本庄や宮本は商業の中心地大坂を誇る表現として「天下の町人」を使った。しかし西鶴は京都の町人を「天下の町人」といつている。『日本古典文学大系』の頭注は、「天下」は天下様すなわち徳川將軍をさし、「天下の町人」は天下様の町人すなわち幕府直轄都市（江戸・京都・大坂・堺・奈良・長崎など）の町人のことであると解説している。

筆者は「天下」を説明するものとして、海保青陵の『稽古談』巻之一にある一文がもっともふさわしいと考える。（海保は江戸を事例にあげているが、京都や大坂にも適用可能な内容である。）

江戸ニテハ天下中ノ町人が江戸ノ町人ユヘニ、ドレガコノ方ノ町人ニテ、ドレハ此方ノ町人デハナイト云ワケナキコト也。

（江戸は日本中の町人が江戸の町人である。したがって誰が江戸町人で、誰は江戸町人ではないという区別はない。）

近世幕藩体制のもとでは三都の他に諸大名が支配する城下町があった。城下町では徳川家を含む他藩の町人が居住し往来することに制限があった。しかし江戸・京都・大坂の三都は諸藩の家臣が居住することを許されていた（藩邸）。まして町人が往来することは自由であった。城下町と三都の違いは、このような違いがあった。三都は城下町と比較しても、はるかに自由であり、出身地や所属を問われない空間であった。これを「天下」と表現したのである。

近代になり、大坂をさすことばとして「天下の町人」が使われ始めた。筆

者は、これを広めたのは本庄栄治郎であったという仮説を呈示したい。幸田の「天下の台所」にたいして三浦が「町人の都」という用語を発明した。これに刺激をうけた本庄が「天下の台所」と「町人の都」を折衷し、江戸時代に使用例もある「天下の町人」を大坂の代名詞として世に問うたのではないだろうか。

政治の中心地江戸に対して商業の中心地大坂を形容することばとして、本庄は「天下の町人」を用いた。「天下」に深い意味はこめなかったと思われる。この言説に新たな意味を加えたのが宮本又次である。幸田・三浦・本庄と異なり、大阪生まれの宮本は「天下」を「権力の真空地帯」と解釈した。封建権力からの自由を獲得した中世ヨーロッパの都市住民に相当するものとして「天下の町人」を思い描いたのである（宮本1959、藪田2010）。

宮本が意図したかは不明であるが、この言説は太閤秀吉を連想させる。大阪人にとって「天下」は豊臣秀吉をさすことばである。大阪に天下茶屋という地名がある。住吉社参詣のときに秀吉が休息したことから太閤殿下茶屋といい、転じて天下茶屋と呼ばれるようになったという<sup>③</sup>。太閤秀吉という「不在の権力者」をいただく大阪町人は権力から自由である。「天下の町人」はこのような心理がはたらくゆえに大阪人に好まれた言説と理解できる。

以上、「天下の台所」「町人の都」「天下の町人」という言説を検討した。その結果「天下の台所」と「町人の都」は近代の造語であること、「天下の町人」を含む3つの言説は大学教官という外部の知識人が世に広めたこと、「天下の町人」は時期によって解釈がかわり、「権力の真空地帯」を意味するまでになったことを確認した。「天下の台所」と「町人の都」は学校教育でも採用され社会に広まった。とりわけ「天下の台所」はどのようにでも解釈できる便利なことばとして、現在も大阪の枕詞として流通している。一方「天下の町人」は宮本又次が愛用したくらいで、現在では死後になっている。

#### 4 八百八橋

近世大坂の都市空間の特徴を説明するときに、江戸の「八百八町」にたいして大坂を「八百八橋」と形容したり、東西と南北に直交する街路について、

## 論文

船場地域では東西の街路を「通り」、南北の街路を「筋」とよんで区別した、と説明されることが多い。

「八百八町」は浮世草子や雑俳に使用例があり、『東海道中膝栗毛』（巻八・序）にも「大江戸の八百八町」と表現されていることが小学館『日本国語大辞典』で確認できる。ところが「八百八橋」の事例は確認できない。近世大坂は運河が発達し橋が多かった。「八百八橋」はこれを形容する言葉として理解されている。しかし大坂の橋研究の第一人者である松村博の著作をみても、「八百八橋」の記述はない（松村1984、1987）。意外にも、この言葉の来歴はよくわかっていないようだ。

筆者が本誌で史料紹介した「大坂御城在勤中書留」は江戸の旗本の家臣が文政8（1825）年頃、在坂期間中の都市観光をまとめたものである。このなかに「橋の数八百八と申事也」という記述が登場する。管見のかぎり大坂の橋数を八百八と形容した初見である（野高2014）。「八百八橋」は大坂城勤番の江戸派遣組の武士の間で広まったと思われる。江戸が「八百八町」と呼ばれることになじんでいる江戸の武士が、大坂に来て、江戸との比較において「八百八橋」を造語した可能性が高いのである。江戸時代の大坂ではほとんど知られることがなく、おそらく明治以降しだいに広まった言葉であると考えられる。

## 5 「通り」と「筋」

「通り」と「筋」の区別は現在の船場地区を中心とした街路の特色としてよく知られている。宮本又次はよくこれを取りあげ、次のような文を書くことが多かった<sup>④</sup>。

大阪では東西を通りといい、南北を筋といい、通りと筋に方角の意味があった。大阪城から出て、川口に至る東西が通りで、これが幹線で、南北の筋はいわば脇道である。

また中尾芳治は『まちに住まう』のなかで、城下町大坂の都市計画を次の

ように解説する。

船場や西船場ではこの町通りが東西となり、これを「通」とよび、脇通りが南北となり、これを「筋」と呼んでいる。この原則は上町にもみられるが、上町東端の谷町筋は縦町となっている。一方、島之内では心齋橋筋や長堀橋筋を中心に南北を縦町とする町が多く、天満でも縦町が南北で横町が東西である。大川や長堀をはさんで町通りの向きが異なるが、上町台地上の北・南平野町は南北が縦町であった。あえて原則を求めるなら大坂城に対して町通りを向ける点にあるか。

このように現在では「通り」と「筋」の区別は江戸時代からあったと説明されることが多い。しかしかつて筆者が指摘したように、この区別は江戸時代には普及していなかったのである（野高1990）。

江戸時代から「通り」と「筋」の区別があった証拠として示されるのが宝暦6（1756）年刊行の『万代大坂町鑑』筋にある次の一文である。

毎町之註に、或ハ丁筋、又橋筋をわかつに、東西のすぢハ通りと云、南北の筋ハ其まゝ筋の字を付く。たとへハ、高麗橋筋は東西の筋なれハ高麗橋通と書、堺筋ハ南北のすぢ故堺筋と書類也。所々皆之に准ず。尤如右通り・筋の字にて東西ト南北の筋を分つといへとも、限て古よりいひ伝る類、天満鳥居筋・嶋ノ内八幡筋・三津寺筋、此等ハ通ノ字ニかへず。余ハ悉東西の筋ハ通の字ニかへて分之。

この冒頭の「東西のすじは通り」「南北の筋ハそのまま筋」を根拠にして、江戸時代から「通り」と「筋」の使い分けがあったというのである。しかし上の文章を全体としてみると、かならずしもそうとはいえないのである。この文章を意識すると

それぞれの町の所在を説明する際に用いる「丁筋」や「橋筋」などの街路名称を区別するのに、(本書では)東西の筋を「通り」、南北の筋を「筋」

で表記する。(中略)ただし古くから慣用されているもの、たとえば「天満鳥居筋」「嶋之内八幡筋」「三津寺筋」は(東西方向の街路ではあるが)「通り」と表記しない。それ以外はすべて東西の筋は「通」の字に変えて区別する。

つまり近世中期の大坂では「丁(町)筋」や「橋筋」のように街路はすべて「筋」と表記されていた(「丁筋」は「本町筋」のように「町名+筋」でよばれる街路をさし、「橋筋」は「心斎橋筋」のように「橋などの目的地+筋」でよばれる街路をさす)。「筋」だけでは、その街路が南北方向なのか東西方向なのかかわからず、道案内にならないと考えた作者小川愛道が、『万代大坂町鑑』だけの約束事として、一部の例外をのぞき、東西の街路(筋)を「通り」と記すことを提案したにすぎないのである。

東西・南北に関係なく街路が一般に「筋」と表記されたことは当時の史料からも確認できる。江戸時代初期、貞享3(1686)年の「馬方仕置之并駄賃之事」は高麗橋筋・本町筋・久宝寺町筋と表記している(現在は高麗橋通り・本町通り・久宝寺町通り)。また大坂町奉行所の書類(「川方地方御用覚書」「地方役手鑑」)をみても、東西、南北の街路を次のように記している。

南北：谷町筋 天神橋筋 堺町筋

東西：京橋筋 高麗橋筋 南久宝寺町筋 天満浜川筋

このように、大坂の市制を管掌する町奉行所は街路を「筋」と表記し、「通り」という名称をつけていないことがわかる。

近代以降については史料を散見した印象にすぎないが、大坂で「通り」と「筋」を区別することが一般化するのには明治20年代頃と思われる。そのきっかけは、幕末から明治初年に現れた居留地では、大坂でも神戸でも街路をstreetとavenyuを区別したことが考えられる。これに刺激され神戸では居留地廃止後も街路を「通り」と「筋」に区分した。同じ現象が大阪では居留地をこえて起こったものと思われる。

明治初期の都市計画がそのあと押しをした。明治維新により大阪の市制は

いくつもの改革がおこなわれた。そのひとつが町名（街路名称）における通し丁目主義の徹底である。この方針が示された明治5年、『大阪新聞』第2号に次の文章が掲載された。

大阪市街ヲ此度四大区七十九小区ニ区分シ、従来ノ町名ヲ廢シ、南北ノ街ヲ何筋、東西ノ街ヲ何通ト唱へ、総テ町名ハ何丁目ト改メラレ、区町ノ境界毎ニ標ヲ掲ゲラレタリ。従来ノ町名ハ紛乱錯雜ニシテ、市中ノモノスラ氣憶シ難カリシモ、向後ハ遠国書翰ノ届方、來訪ノ客等ニ便ナル、知ルベキナリ。

たとえば現在、伏見町通りには東から西へ伏見町1丁目から伏見町5丁目展開している。これが通し丁目主義にもとづく町名表記である。ところが明治5（1872）年3月17日以前の町名は本鞆町、本天満町、伏見町、呉服町に分かれていたのである。これでは、本鞆町、本天満町、呉服町がどの街路に面しているのかわからない。市域外の人々にも分かりやすいよう、町名の表記は「街路名+丁目」（通し丁目主義）に変更しようというのが、明治5年の変更の眼目であった。大坂（大阪）では一部の例外を除き、東西方向に縦町、南北方向に横町が展開している。そこで南北方向の街路は町名と無関係なのでこれまでどおり「筋」、両側町が連続する東西の街路は「通り」と表記する原則に改めたのである。

東西の街路を「通」、南北の街路を「筋」と表記し区別することが公表されたのは、管見の限りこれが初めてである。これをきっかけに、次第に市民の間にこの区別が普及した。

大阪に市制が施行された明治21（1888）年に『旧市制記』が発行された。この下巻に次の文章がある（下線部筆者）。

旧志ニ曰ク、古昔京都ノ地ヲ闢クヤ 紫宸ヲ以テ中央ト為シ、是ヨリ町少路ヲ開ク。凡ソ諸国ノ街路亦タ皆ナ標準トスル所アリト。今本地ノ如キモ東城郭ニ起リ西ニ達スルヲ縦街トシ、某通ト稱シ、南北ヲ横街トシ

某筋ノ称アリ。

ここには東西の街並みを豎町とし「某通」と呼んだ。一方南北の街並みを横街とし「某筋」と呼んだと記されている。これによって江戸時代からこの呼称があったとも読み取れる。しかしまた、『旧市制記』が執筆された時期に「通り」と「筋」の区別があり、それを反映させたとも解釈できる。その根拠としては『旧市制記』下巻が明治維新後の市制を扱っていることがあげられる。

明治30年代になると、この区別が市民のあいだで常識となった。明治35（1902）年刊行の『大阪と博覧会』は、

大阪の習慣として、東西に通じたる町を「通」といひ、南北に通じたる町を「筋」といふこと多し

と記している。「通り」と「筋」を区別することが、大阪の習慣とみなされるまでになったのである。

## 6 太閤さんの町

東京にたいする大阪の反骨精神をあらわすことばとして「大阪は太閤さんの町」という言説がよく使われる。少なくとも今の大阪人は家康よりも秀吉に親しみを感じている。ところがいつ頃から豊臣びいきになったかを調べてみると、はなはだころもとなないことがわかる。

藪田は、中之島に京都豊国神社が勧請されたことがきっかけで豊臣秀吉の再評価が始まり、明治36（1903）年の秀吉像鑄造、昭和初期の大阪城天守閣再建で復活したと述べている（藪田2010）。近代になってから秀吉が評価が高まったという点は筆者も同じ見解である。

大阪に勇気をあたえるシンボルとして秀吉が登場するのは、管見の限り、農商務省次官金子堅太郎が大阪商業会議所で明治29（1896）年におこなった講演のなかである<sup>⑥</sup>。金子は大阪が商工業の中心である理由として地勢と歴史をあげる。その歴史の要点を次のように語る。



- ①日本の商工業の中心的役割をあたえるため、豊臣秀吉は大坂に城を築き、都市を開いた。大坂商人は豊臣氏によって商権を与えられた。
- ②豊臣氏の滅亡とともに諸大名は大坂を離れ江戸に移り、そのため、商工業の中心点も大坂を去り、大坂商人は商権を失う危機に直面した。
- ③この時にあたり、大坂商人は「大阪は大阪自身の力に依て立たんと決心」した。この奮起によって、政権は江戸に移り、諸侯も江戸へ去ったにもかかわらず、「江戸へ移ることを為さず遂に商工業の全権を握るに至」ったのである。彼らは「実に幕府の応援も籍らず、諸侯の尽力も仰がず、自治自営の精神を奮」った結果、「日本商工業の権力は此方に掌握して」現在に至っているのである。

この演説が言外に当時の大阪商工業者に奮起をうながしているのは明らかである。豊臣家の滅亡とともに諸大名が大阪を離れたため経済的な危機に直面した(②)ことは、明治維新によって諸大名が東京に移住したことにより大阪の蔵屋敷が閉鎖され、ために大阪経済が沈滞した当時の状況と重なる。

金子の演説の眼目は、大阪人の自助精神を評価したことである。大阪市民に対して、大阪が現在直面している経済的危機は江戸時代初期の大坂町人も経験したのだ。君たちの先祖は誰の力を借りることもなく、自治自営の精神で商工業の権力を手中におさめたではないか。だから諸君にも政府に頼ることなく、自力で大阪経済を復活させる力があるはずだ。このように金子は大阪市民に呼びかけたのである。

これがいかに革新的であったかを知るために、それまでの、大阪人による大坂観をみておこう。明治15(1882)年、大阪商法会議所は、大坂が経済的に繁栄したのは、地勢上日本の中心に位置する要港であったからであり、人為的要素なく、自然に全国の経済を支配したという考えを示した。これに対し、翌年、大蔵省の役人であった遠藤芳樹は、幕府の保護によって大坂が商権を握ったとする見解を示した(野高2007)。大坂の商業的発展が幕府の政策であったか否かで両者の見解は異なるが、秀吉や大坂町人への言及がみ

## 論文

られない点では共通する。

金子の演説を載せた『商業資料』は、その2年前に永江為政執筆の「大阪策」という論説<sup>⑦</sup>を掲載している。その要旨は以下の通りである。

- ①豊臣秀吉は大坂城を築城し、大坂を政治の中心とした。しかし商業の中心地とする考えはなかった。
- ②徳川氏が政権を握るに及び、政治の中心は大坂から江戸に移動した。一方、商業の中心は堺から大坂に移った。こうして政治の中心江戸と商業の中心大坂が相両立して今日に及んでいる。
- ③大坂の繁栄は商業的独立によるもので、政治的な関係はない。
- ④現在の大阪があるのは、徳川氏の保護奨励によるものである。

大坂は政治とは無関係に町人の商業活動によって発展したという点では長江の論調(③)は金子と共通する。しかし、その発展の要因は幕府の保護政策によるものであるとする永江の見解(④)は、幕府や諸大名の援助をうけずに大坂町人が自助の精神を発揮して発展したとする金子の論調と大きく相違する。なにより大坂商人が大坂経済にどのように関わったかについての言及がみられない。大阪人は自らを評価していないのである。

金子の来阪まで、大坂を評価する基準は地勢か権力かの2つしかなかった。しかし彼の演説によって、新たに大坂町人の自助の精神が加わった。

徳川は実在した権力である。しかし豊臣秀吉は城主ではあっても城下町には関与していない(金子はそのように評価した)ゆえに、空虚な不在の権力者である。自助の精神はこうした空白地帯でこそ発揮される。宮本のいう「権力の真空地帯」とつながる意識が、このとき大阪人に植えつけられたのである<sup>⑧</sup>。これをきっかけに、大阪人にとって秀吉は経済都市大阪のシンボルではあっても権力者ではなくなった。東京に依存することなく自らの努力で大阪が経済的に発展するという言説のなかで秀吉があらわれ、このような意識が明治中期以降、大阪市民に広がったと思われる。秀吉をめぐる言説は大阪城との関係で語られることが多く、都市大阪との関わりで語られることが少な

いのはこのためである。

「太閤さんの町」が大阪市民の“常識”となるのはもう少し後のことである。大正10（1921）年、一般公募によって『大阪市の歌』が作られた。歌詞には神代から今にいたる大阪市の来歴がもりこまれている。そこには「高津の宮」「難波の春」「東洋一の商工地」「咲くや木の花」といった、難波・大阪を連想させる言説が盛り込まれている。しかし大阪城や太閤秀吉はどこにもみえない。

大阪のシンボルとして太閤秀吉が定着するのは、関一市長による大阪城天守閣再建事業と、天守閣完成の2年後、昭和8（1933）年に開催された大阪商工祭であろう。豊臣築城350周年にあたるこの年、秀吉を筆頭に大阪の発展に寄与した先覚者の霊を祀ることがねらいであった（野高2007）。

大阪商工祭のあと、『大阪市勢要覧』に載る大阪市沿革は秀吉を次のように取り上げている。

太閤秀吉が諸国統一の壮図を懐いて豪壮な大阪城を築き上げたことは実に今日の大坂の繁栄を齎した起りであつて、豊臣家滅んで徳川家之に代つて後、愈々盛んとなり諸国の財貨続々として流れ込み所謂天下の台所として商才優に士魂を押し、彼の蒲生君平の「大阪の豪商一度怒つて天下の諸侯懼るゝの威あり」との言葉をも生むに至つた。

大阪の歴史的経緯のなかで、秀吉の役割はシンボル（大阪城）を築いたことにつきる。それは大阪繁栄のきっかけにすぎない。繁栄を実現したのは町人自身である。権力者としての豊臣秀吉は介在していないのである。大阪町人が自力で商工業の権力を得ることができたのは、豊臣家が滅亡したおかげである。このような声が聞こえるようである。こうして大阪城主太閤秀吉は、「不在の権力者」として、大阪人に勇気をあたえる存在になったのである。

権力から自由な大阪という意識は小学校教育をつうじて広く市民に共有されるようになった。昭和元（1926）年、大阪市の小学校教育関係者が、市民を対象に郷土研究（地理・歴史）の資料・読物として『大正大阪風土記』を

刊行した。このなかに、大阪市の沿革を述べた次の記述がある(下線部筆者)。

貴族や特権階級を持たない大阪は全くの自由都市であつた。大阪の町人は天下の町人として活躍し、江戸時代を通じて日本国中の消費を一手に引受け、更らに武家に対して莫大なる金銀を融通し、富の力に因つて往々に武家の頭を抑へ出した。(中略)大名のみならず江戸町人は常に大阪町人から借金をして居た。大阪は天下の台所であると共に天下の金融機関であつた。

江戸時代の大阪は「権力の真空地帯」であるゆえに自由な都市であつた。このような意識が明治時代後半から大阪ではぐくまれた。この「権力の真空地帯」にふさわしいシンボルとして天下人太閤秀吉が浮上したのである。そして「太閤さんの町」と「天下の町人」は、ともに権力の真空地帯(都市)とその住民をさす言説として、大阪に定着したのである。

## 7 お奉行の名さへ覚へず

江戸時代の大坂町人が反徳川の心情をもっていたことを示すものとして、必ず引き合いに出されるのが小西来山の次の一句である。

お奉行の名さへ覚へず としくれぬ

『小西来山全集』の編者である飯田正一はこの作品は宝永元(1704)年の作と解釈している。この年の11月、西町奉行が松野助義から大久保忠形に交替したことが根拠らしい(藪田貫2010)。この比定が正しければ、この句は次のように解釈できる。「年の瀬近く、町奉行の交替があり、新しいお奉行が知らされたはずだが、そんなことはすっかり忘れて年の暮れを迎えることになった。」

「大坂も大坂 まん中にすんで」という前書があるこの句は、現在「大坂では行政官である町奉行の名前も知らずに暮らすことができる」と解釈され

ている。そのためか、いつしか

お奉行の名さへも知らず としくれぬ

と、誤って理解されることが多い。

藪田はこの句に反徳川の心情をみることに否定的である。大坂町人にとっても町奉行の存在は大きいことから、その名前を知らないわけがないというのがその理由である。妥当な見解であるが、町奉行への反感ないし無関心が背景にないとすれば、この句の俳味はどこにあるのだろうか。

まず飯田の解釈が正しいと仮定した場合である。幕府が西町奉行松野助義の役替を決定したのは10月1日、後任者の大久保忠形の就任を発表したのは11月15日である。大久保の町奉行就任を伝える町触が確認できないので、大坂町人がいつ大久保の名前を知ったのかは確認できない。また大久保がいつ大坂入したのかも不明である。かりに師走に大坂入をしたとすれば、大坂町人にとって新町奉行の大坂入は新鮮なニュースであり、この句にそぐわない。また大坂入が年明けになったとすれば、まだ町奉行の名前が大坂町民に知らされていない可能性がある。「お奉行の名さへ知らず」の方がふさわしいことになる。この句が生きているのは、年末に町触で新町奉行の名前が知らされたものの、大坂入りは年明けになった場合である。

次に、筆者の仮説を呈示する。『小西来山全集』をみると、この句には「大坂ものあふさかまん中にすんで」という前書を記した色紙がある。「大坂者が大坂のまん中に住んで」という意味である。この前書と句をセットにして考えると、「大坂に住んでいる大坂町人だからこそ町奉行の名前を覚えられなかった」という解釈ができる。この解釈に符号する背景が存在する。

大坂町奉行は通常、東町奉行と西町奉行の2人制である。しかし元禄年間、短期間ではあるが幕府は大坂町奉行の3人制をしいた。三人目は江戸に常駐し、大坂と幕閣の連絡役をつとめたようだ。大坂町奉行とはいっても大坂町人にはなじみのない役人であった。

元禄15(1702)年11月28日、幕府は大坂町奉行3人制を改め、2人制に戻した。それを知らせる町触が翌12月6日に出た。頭書によるかぎり町触によって大坂町人に伝えられた情報は、それまで町奉行であった中山時

## 論文

春が役替になったことだけである<sup>⑨</sup>。町奉行の定数が3人から2人に変更したことは伝わっていない可能性が高い。当然、まもなく中山の後任が決まることを大坂町人は予想するはずである。ところが時が移り、2年後の宝永元年冬、別の町奉行の交替を知ることとなる。この関係を整理すると次のようになる<sup>⑩</sup>。

江戸 東 元禄15年11月28日 中山時春の町奉行職を解く  
大坂 東 元禄15年11月28日 太田好寅の堺奉行兼帯を解く  
大坂 西 宝永元年10月1日 松野助義の町奉行職を解く  
大坂 西 宝永元年11月15日 大久保忠形を町奉行とする

このとき、2年前に交替した中山の後任は（実際には存在しないが、大坂町人は3人制の廃止を知らないと仮定する）誰だったのだろうか、うっかり忘れたまま2年も経過してしまったのかと述懐する町人がいてもおかしくない。その気持ちをすなおに詠んだのが、この句ではないだろうか。大坂の町人が江戸にいる「大坂町奉行」中山に接する機会はなかった。したがってその交替の前後のこともよくわからなかった。大坂にいたからこそ江戸のことはわからなかったという感慨が、「大坂者が大坂のまん中に住んで」という前書きに現れている。これが当時の大坂町人の共感を得たと筆者は考える。なお、この解釈によれば、この句は宝永元年の前年（元禄16年）の作でもおかしくない。この場合は「前年の冬に江戸にいる東町奉行の交替をしらされて1年になるが、そういえば後任の町奉行は誰なのだろう。大坂者には江戸の事情にうとく、新任のお奉行様が誰なのか、うっかり確かめずに経過してしまったことよ」という解釈となる。

いずれにせよ、この句に反権力・反徳川の心情は認められないのである。したがって反徳川の心情をうたった句とする解釈は近代の産物と考えられる。以下は推測ではあるが、秀吉が大阪のシンボル化する頃、この解釈も生まれたのではないかと考える。先に述べたように、大阪における太閤さんは「実在しない」権力者であるゆえに近代大阪人に愛された。都市の中心における

権力の不在を好む大阪人が「お奉行の名さえ覚えぬ」の句に共感して、この解釈が発生したと筆者は考える。

## まとめ

最後に本稿で明らかにしたことをまとめておく。

- ①大坂を代表する言説である「天下の台所」「町人の都」は、それぞれ幸田成友、三浦周行の造語である可能性が高い。一方、近世から使用例のある「天下の町人」は本庄栄治郎が大坂の言説として広めた。いずれも大学の教官という知識人が使い始めたこと、それぞれの造語を三人が共有したことが、こうした言説が広まる要因の1つになった。ただし戦後の学校教育に採用された「天下の台所」と「町人の都」は市民権を得たが、その機会がなかった「天下の町人」は現在では死語となった。
- ②近世大坂像を示す言説の大半は近代以降の造語である。また近世から生まれた言説も、新たに近代的な解釈を付されて広まった。
- ③「天下の台所」「町人の都」「八百八橋」といった言説は大阪人の造語ではなく、江戸・東京人または東京で大学教育を受けた者が生み出した可能性がたかい。都市像を描くとき、内部からはなかなか描きにくく、外からの評価を内部が受け入れ一般化していく事例として大坂の言説を位置づけることができる。
- ④「天下の町人」「太閤さんの町」「お奉行の名さえ覚えぬ」は、「権力の真空地帯」「不在の権力者」を嗜好する近代の大阪人が、大阪を誇る言説として選びとったものと考えられる。明治29年の金子堅太郎の演説が、こうした大阪人の心情を生むきっかけとなった。

## 註

- ① 大坂を説明する言説のひとつに「くだおれ」がある。これについては渡邊忠司が『近世「食い倒れ」考』で詳細に論じているので、本稿では扱わない
- ② この講演は翌年『大阪文化史論』として出版された。引用は本書による。
- ③ 堀田暁生編『大阪の地名由来辞典』『天下茶屋』東京堂出版 2010年

## 論文

- ④ 宮本又次「大阪の町名に関する特徴」(大阪町名研究会編『大阪の町名』清文堂出版 1977年)
- ⑤ 『大阪市史』第3 補遺
- ⑥ 『商業資料』第3 卷第6号
- ⑦ 『商業資料』第1 卷第4号・7号。本史料は古川武志の教示を得た。
- ⑧ 私のいわゆる「不在の権力者」と同じ趣旨のことを、宮本又次は『大阪町人論』のなかで「大阪は半権威主義でありながら、(中略) 事大主義でもあった。権威から遠くにあることはそれに反撥しつつも、それを高く遥かにあうぐようになつたのである」(296頁)と述べている。
- ⑨ 達75 (『大阪市史』第三)。この町触は頭書しか伝わらず、本文が欠落している。
- ⑩ 1 列目は該当する町奉行の執務地、第2 列は大坂東町奉行・西町奉行の区別を示している。

## 参考文献

- 岩城卓二 2006 『近世畿内・近国支配の構造』 柏書房
- 宇佐美英機 2010 「身分的周縁論の分析方法を考える」(大橋幸泰・深谷克巳編『〈江戸〉の人と身分六 身分論をひろげる』吉川弘文館)
- 大阪市都市住宅史編集委員会編 1989『まちに住まうー大阪都市住宅史』 大阪市
- 幸田成友 1910 『大塩平八郎』 東亜堂書房
- 幸田成友 1911 「維新前の大阪市制」(大大阪記念講演『大阪文化史』)
- 幸田成友 1911 「日本経済史上の大阪」(大大阪記念講演『大阪文化史』)
- 幸田成友 1934 『江戸と大阪』 富山房 1995年
- 塚田 孝 2002 『歴史のなかの大坂 都市に生きた人たち』 岩波書店
- 塚田 孝 2006 『近世大坂の都市社会』 吉川弘文館
- 野高宏之 1990 「町・通り・筋」(『大阪の歴史』第31号)
- 野高宏之 2007 『天下の台所』と『大大阪』(『大阪の歴史』第70号)
- 野高宏之 2014 「史料紹介 大坂御城在勤中書留」(『奈良県立大学研究季報』第24巻第4号)
- 本庄栄治郎 1924 「大阪経済史」(市立大阪市民博物館編『大阪文化史論』 宝文館)
- 本庄栄治郎 1926 「徳川時代概観」(『社会科学』第2 巻第7号)
- 本庄栄治郎 1928 『経済学全集 第30巻 日本社会経済史』 改造社
- 松村 博 1984 『八百八橋物語』 松籟社
- 松村 博 1987 『大阪の橋』 松籟社
- 三浦周行 1917 「町人の都」(『朝日新聞』1917年8月4~8日。のち『大阪と堺』(岩波書店 1984年)に収載。



- 三浦周行 1924 『大阪法制史』(市立大阪市民博物館編『大阪文化史論』宝文館)  
宮本又次 1959 『大阪町人論』ミネルヴァ書房  
藪田 貫 2005 『近世大阪地域の史的研究』清文堂出版  
藪田 貫 2010 『武士の町—大坂』中央公論新社  
渡邊忠司 2003 『近世「食い倒れ」考』東方出版

## 引用史・資料

- 「馬方仕置之事并駄賃之事」(『大阪市史』第三 補遺2～6頁 大阪市 1911年)  
『大正大阪風土記』大阪市教育部共同研究会編 1926年  
『大阪市史』第三 大阪市 1911年  
『大阪市勢要覧 昭和14年度版』大阪市 1939年  
『大阪新聞』第2号 1872年4月  
『大阪と堺』三浦周行 岩波書店 1984年  
『大阪の町名』大阪町名研究会編 清文堂出版 1977年  
『大坂町鑑集成』有坂隆道・藤本篤編 清文堂出版 1976年  
『大阪と博覧会』第5回内国勧業博覧会協賛会編 1902年  
『旧市制記』1988年  
『稽古談』(『本多利明 海保青陵 日本思想大系44』岩波書店 1970年)  
『小西来山全集』前編 飯田正一編 朝陽学院 1985年  
『社会科1 わが国土』大阪書籍 1947年  
『商業資料』第1巻第4号・7号(1894年)、第3巻第6号(1996年)  
『商事慣習問目並報告書案』(『大阪市史』第5 1911年)  
『大阪商工祭記念誌』大阪商工祭協会編 1933年  
「地方役手鑑」(『大坂町奉行管内要覧』大阪市史史料第15輯 1985年)  
「川方地方御用覚書」(『幕府宿継文書・川方地方御用覚書』大阪市史史料第6輯 2005年)  
『奈良県立大学研究季報』第24巻第4号 2014年  
『日本古典文学大系 48 西鶴集 下』岩波書店 1960年  
『まちに住まう—大阪都市住宅史』大阪市都市住宅史編集委員会編 平凡社 1998年